

# Omsorg för Alla

「この方はトイレ排泄は難しい」を覆し、  
トイレでの排便と笑顔を取り戻した事例

発行：ユニ・チャーム メンリック株式会社 〒107-0051 東京都港区元赤坂 1-5-12

「Omsorg för Alla」は、「みんなのケア」を意味するスウェーデン語です。「Omsorg」には、「相手の尊厳や思いを大切にしたい継続的な思いやり」という意味が込められています。本冊子では、TENAを活用して、すべての人の「尊厳(Dignity)」を大切にしたいケアを実践しておられる「ケア処方事例」を紹介します。

## ご利用者プロフィール

Dさん(女性) 80代 要介護4。周囲の機微に敏感で、義理を大切にされる活発な性格です。ご自宅で生活されていた2022年にケガをされ、脊椎損傷から急性期病院に入院。リハビリ目的でリハビリテーション病院へ転院しました。療養を重ねたものの在宅復帰が難しいと判断され、介護老人保健施設に入所後、2023年に特養きたうら様に入所されました。

## 両下肢不全麻痺の影響で 排便への不安をかかえる

入所段階からはっきりと受け答えができて、自分の主張もしっかりされていたDさん。認知症の症状も見られませんでした。ただ、下肢の不全麻痺が発生しており、排泄は24時間おむつ対応。入所当時は、表情も暗く、こわばっていた状態でした。またバルーンカテーテルも挿入していたことから、臥床時などは少し動くと違和感や痛みを訴えて苦しうに過ごしておられました。

食事は普通食をしっかり食べることができ、水分摂取も十分にできていましたが、特に悩んでおられたのが排便です。入所前からかなりの量の下剤に頼っている状態で、「お尻が痛い」、「違和感がある」と訴えることがしばしばでした。両下肢不全麻痺の影響もあり、便意があった時でも「出そうで出ない」と訴えることが多くみられました。ご本人の希望で摘便しても、「まだ出ていないので出してください」とおっしゃるほか、一日に何度も「便のチェックをお願いします」と毎日ご希望されるなど、排便へのこだわりが強く違和感に苦しんでおられました。

## そのひと言を見逃さなかった 「便が出そう」の声に耳を傾け始めた挑戦

大柄でしっかりした体格ながら上下肢の筋力が衰えてしまっていたため、移乗や移動の介助も一人では難しい状態。前施設の職員さんからも「大量の下剤を投与しても出ず、座薬を入れて入浴前の時間帯でやっと出るか出ないかという状態です」と伝えられたこともあって、当初Dさんはトイレ誘導の対象外でした。それが変わったのは「便が出そう」というDさんからの訴えにスタッフが耳を傾けたことがきっかけでした。

「どうすればご本人の希望をかなえられるか」とスタッフで



社会福祉法人清栄会  
特別養護老人ホーム きたうら（茨城県行方市）

「そうだ！トイレに行こう」をスローガンに掲げ、ご利用者が快適に過ごせることを目的にトイレ排泄を支援。その実現に向けてTENA コットンスペシャル+コンフォートの活用を進めている。2021年TENA導入。

話し合い、2人で介助する方針を決定。ご家族にもご承諾いただき、トイレに誘導しました。最初は苦しそうなお様子でしたが、腹部マッサージを行ったところ、便が出たのです。その瞬間、ご本人もとてもすっきりした、ほっとしたような顔をされていました。

とはいえ、膝の曲げ伸ばしにも時間がかかるご本人の負担も考慮し、まずは1日1回を毎日にトイレ誘導を開始することになりました。その後もトイレに行けば毎回排便があるとはいきませんでした。状況は次第に改善。下剤を併用しながら3日に1回は出るようになり、「トイレに行きたい」という発言も、「出そうだから行きたい」とおっしゃるようにならなくなりました。トイレでの排便を後押ししつつ、水分は毎日1200ccから1500cc摂取を基本にしました。

おむつは当初、テープ止めタイプを使用していました。その後、トイレでの着脱がしやすいTENAフレックス、そしてより下着に近いTENA



「ここでの暮らしは楽しい」と話されるDさん

## Dさんの パッドと 暮らしの変化



おむつでの排泄介助のみ

コットンスペシャルとコンフォートミニの組み合わせに変更しました。移行中にはもちろん、「便が漏れたらどうしよう」という不安もありました。そこで医務とも連携しながら酸化マグネシウムなどの下剤の量を少しずつ調節し、徐々に移行していきました。この取り組みが続けられた背景にはご施設内で、まずは現場で試してみて、ご本人はもちろんスタッフ間でも成功体験を共有しながら試行錯誤を続けていくという方針や、ご利用者のためになることはまず「やってみよう」という共通認識が共有されていたことも大きかったといえます。

### 当たり前をあきらめない 「そうだ！トイレに行こう」

社会福祉法人清栄会には、きたうら様を含め3施設あります。合同のCST会議で取り組む3施設共通の目標として、2024年初頭スローガンに「そうだ！トイレに行こう」を掲げました。トイレに行くことは本来、生活するうえで当たり前のこと。ならば排泄ケアではおむつから下着への移行を支援し、ご利用者が気持ちよく過ごせるようにしようと考えられたものです。きたうら様ではケアの目標を、トイレ誘導ができるご利用者は「TENAコットンスペシャル」を使うと定め取り組みを開始しました。ご利用者の体の動きや活動性を維持できるだけでなく、おむつ中心の生活から下着に近い生活に変わること、ご本人の自立意識や自信の回復にもつながり生活の質も向上します。おむつ交換中心のケアから、トイレでの自然な排泄へと移行する大きな後押しにもなるとの期待がこめられました。

きたうら様では、この方針導入前には50%程度だったトイレに座れる人の割合が80%に上昇。スタッフの間にも「まずはトイレ」という意識が根付き、自発的に「お試し」でトイレ誘導を行う文化も生まれました。もちろん、「この方は難しいのでは」という意見がでることもあります。そんなときでも、「どうすればトイレに行けるようになるか」を常に話し合い、ケアの質と現場の負担のバランスを取りながら挑戦し続ける。その成功と失敗の体験を他の施設とも共有することで、法人全体の排泄ケ

### オンラインTENAアカデミー

製品活用のヒントやよりよいコンチネンスケア手法を学ぶ「オンライン学習プログラム」、セミナー情報などをご覧いただけます。是非ご活用ください。



<https://tena-academy.jp>

After

ベッド&車椅子

車椅子



2人介助にてトイレ排便が可能に

アの改善と質の向上にもつながっています。

### できない理由より、どうしたらできるか 現場発の2人介助体制

トイレ誘導時の2人介助を実現することは、どのご施設でもなかなか難しいのが現状です。きたうら様ではこの課題を、手が空いた時に行うプラスアルファの業務ではなく、メイン業務と位置付けて、現場主任がスケジュールを組むという発想の転換で解決しておられます。アセスメントをもとにご利用者がトイレを希望する時間帯には2人で対応できるように人員を配置する。あるいは食後などスタッフの数がそろっている時間帯を選んでトイレ誘導をするなど、ご利用者とスタッフの様子を見ながらスケジュールを組んでいきました。スタッフにも「この時間はトイレ誘導がメイン業務」だと意識づけることで、「トイレは職員2人で対応するもの」という意識が当たり前になっていきました。ご利用者から「トイレに行きたい」と訴えられることもあれば、そうでないこともあります。そうでない方には、スタッフがアセスメント結果などを参考にしながらタイミングをはかってお声がけをし、排泄を促す工夫も取り入れています。

### トイレが自信を取り戻してくれた 「自分で決める」が生み出した変化

Dさんの排便のサイクルはその後、劇的に改善していきました。現在は食後や入浴前に「トイレに行きたい」とおっしゃることが普通になり、トイレに誘導する回数も1日2回程度で安定しています。そしてなにより、座薬や摘便、浣腸が不要になり、トイレで自力排便ができるようになったのです。

その後、日々の生活の様子もめきめきと変化していきました。本来の前向きな性格を取り戻し、失敗してもトイレでの排泄をあきらめず、毎日トイレに行けることが励みになり、自信となったことで、今ではとても表情豊かに過ごしておられます。最近では、面倒見の良い性格も相まって、他のご入居者の意見を職員さんに伝えるグループのまとめ役も果たしておられます。

入居時には「無理だろう」と思われる方でも、ご本人の声に耳を傾けてまずは「やってみる」。Dさんが笑顔とバイタリティーを取り戻した背景には、「トイレに行く」という当たり前のことを大切にしながらチャレンジを続ける、スタッフの皆さんの試行錯誤の積み重ねがありました。